第３回ユースエコクラブシンポジウム

～Captains of Environment ～

実施報告書

★ この行事は、公益信託・愛地球博開催地域社会貢献活動基金の助成を受けて実施しました。

★ この報告書は、当会ホームページでもご覧いただけます。

開 催 日　　平成２６年３月８日（土）～９（日）

開催場所　　犬山国際ユースホステル

主　　催　　ＮＰＯエコバンクＪａｐａｎ

共　　催　　こどもエコクラブ全国事務局　（公益財団法人　日本環境協会内）

後　　援　　愛知県

参 加 者　　14名（内　愛知県9名）

保　　険　　年間を通じ、以下の団体保険に加入

引受会社　　富士火災海上保険株式会社

契約内容	対人賠償	１事故あたり	限度額	10　億円
		１人あたり	限度額	3　億円
	財物賠償	１事故あたり	限度額	3　億円

当事業期間中の保険契約内容

国内旅行傷害保険	死亡・後遺障害	１人あたり	１千万円
	入院保険金		4500円
	通院保険金		3000円
	個人賠責		5千万円

シンポジウム開催までのの経緯

4　月　　助成金の内定を受け、準備を開始。

7　月　　昨年の参加者で今年の参加予定者には、テーマに関連した資料や視野を広げるために役立つと思われる学習資料を、当会から毎月末に送付する。
同時に昨年の課題を含めて今年のテーマについて取り組みを開始する。
テーマごとのメーリングリストやLine（SNS)を利用し、シンポジウム開催まで意見の構築を進める。

9　月　　後援申請その他の準備を終える。
日本環境協会のご協力を得て、参加者募集の書類を発送する。

1　月　　最終的な参加者を決定。テーマごとのメーリングリスト、ＬＩＮＥ(SNS)よる話合いに加わり、議論を進める。

3　月　　シンポジウム開催

※参考
ＬＩＮＥ・・・スマートフォンで無料通話とメッセージが送信できるアプリケーション。
ＳＮＳ・・・・ソーシャルネットワーキングサービス
Ｗｅｂ上で友人・知人間のコミュニケーションを円滑にする手段や場を提供したり、趣味や嗜好・居住地域など「友人の友人」といったつながりを通じて新たな人間関係を構築する場を提供する会員制のサービス。「既存の参加者からの招待がないと参加できない」というシステムで、サイト内に掲載される広告等から上がる売り上げの一部を紹介料として徴収するという収益モデルになっている。

【活動内容】

平成２６年３月８日（土）

１３：００　集合

１３：３０　昼食

１４：００　グループごとに、これまでの話し合い内容について報告。
有識者より考え方、方向性について指導。
自己紹介後、グループに分かれて話し合い再開

１９：００　夕食

１９：４５　話し合い再開

２１：００　話し合い終了

平成２６年３月９日（日）

８：３０　前日まで話し合った内容を、各グループごとに報告。
引き続き最終まとめに向けて話し合いを継続、発表資料を作成。

１２：２０　昼食

１３：０５　発表

１３：０５　「まちづくり」グループ
「観光から考えるまちづくり」
まちづくりというテーマを観光からの観点で考えることとし、中でも日本の国土の73%を占める中山間地域に注目した。
中山間地域の地域資源は、間伐体験、農業体験等の「維持」、バードウオッチング、朽木観察

等の「調査」、紅葉狩り、カヌー等の「レジャー」の３つに分類できるが、それらの中心には地域の人との交流がある。そこで、地域住民、学生、持続的な農業をテーマに企画を立てることとした。

学生が中山間地域での体験を通じ、地域の人たちと交流を図りながら、まちづくりを考える次の3泊4日の企画を考えた。

日程	内容
1日目	アイスブレイク、地域見学、町にとって有益となる商品や手段などの開発
2日目	農業体験、草刈り、料理、商品開発
3日目	いきもの観察、カヌー、町の人の声を聞く交流会、商品開発、天体観測
4日目	発表会

また、もうひとつ環境NGOが中心となり、企業等から協賛金を集め、土地を提供できる農家と、農業をしたい人の橋渡しをし、農業を持続的に行う事業も企画した。

課題としては、中山間地とのつなぎ役の育成、効果的な情報発信、企画運営のノウハウがない、などがある。

＜質疑応答＞

Ｑ.企画の実行のためには現地労働力が必要だが、高齢化していない地域を想定しているのか。

Ａ.高齢化等の条件は問わない。貸してくれる土地があり、企画に協力してくれる地域ならばよい。

Ｑ.商品開発とは具体的にどういうことをするのか。

Ａ.地域特産物の加工、販売方法の開発など。メンバーがこれまでに実際に商品開発の体験を行っており、それをイメージした。

＜講評＞

・実際一番問題となるのは高齢化だと思う。継続的に実施していくため、つなぎ役が重要である。

・つなぎ役となるＮＧＯを探すのが最大の課題。

＜感想＞

・今回企画までできたので、次回は「まちづくり」だけでなく、生物多様性、エネルギー等の他テーマも取り入れた企画を作ってみたい。

・メンバーが体験した商品開発では、実行直前まで詰めたが、実行には至っていない。参加者と地元の距離があると計画が進みにくいという問題がある。

１３：３５　生物多様性グループ

「人間の生活圏における生物多様性 ――― 生物多様性の回復を目指した緑地利用」

生物多様性の話題では人間以外の生物にスポットが当たりやすいが、人間の営みも生物の生息に大きな影響を与えているため、人間の生活圏において、その他の生物と共生できる可能性を模索する。

都市近郊で生物多様性が失われる原因としては、緑地等の生息場所が住宅地の中で点在しており、連続性がないことではないかと思われる。そこで、未耕作地、寺社、空地等の都市に存在する緑地を活かす方法を考える。

緑地は、地域住民にとって火災の延焼防止に役立ち、憩いの場や環境教育の場である反面、手入れを怠った緑地は害虫の増加や火災・犯罪の一因にもなる。緑地の利用には住民の理解が不可欠であり、緑地の重要性についてイベントなどで普及活動を行い、緑地の有益性を示すことが重要である。

また、もうひとつの方法として住宅地から離れた河川などを利用する方法がある。河川は多くの生物の生息地であり、面積も広いため複合的な緑地となりうる。

都市部における生物多様性の保全のためには、住民の意見とのバランスがとれた保全のあり方を考えることが、今後の課題として挙げられる。

＜質疑応答＞

Ｑ. 虫や鳥は、緑地があればやってくるわけではない。二次的な要因もあるのでは。

Ａ. 今回はまず人間と動物の関係について考えた。

Ｑ. 害獣など、増えて困る動物もいる。何を増やしたいと考えているのか。

Ａ. 目標としては、動植物の数や種類を増やし、一定の生態系を作りたい。

Ｑ. 住民を対象としており、行政がやる事業のように思われる。どのように行政に訴えていくのか。

Ａ. 都市住民にどれくらい緑地の需要があるのか、統計データをとり、行政に示せればよいと思う。

Ｑ. 竹林の拡大が問題となっているが、それについてどう考えるか。

Ａ. 地域によっては、住民やボランティアによる伐採がされているが、意識が低い地域もある。まず住民が問題意識を持つことが重要だと思う。

＜講評＞

・空地にも、空地となっている理由があり、それを探らないと解決に結びつかない。空地を活用すると言っても活用したい人はまず見つからない。

・工場のグリーンベルトは、もともと公害防止や目隠しのためだったが、

多様な生物の生息地になっており、最近は企業も生物多様性に貢献していることを前面に出している。つまり、空地の存在意義が変わってきている。住民の需要とのバランスが大事である。

＜感想＞

・幅広い議論ができ、刺激を受けた。次回は海をテーマにしてみたい。

１４：１０　環境ニュービジネスグループ

「環境についての新規ビジネスについて」

環境ニュービジネスとして、まずエネルギー関連、農業・生物関連、街づくり関連の３つのテーマを考えた。

エネルギー関連としては、燃料電池による大規模発電、農業・生物関連では休耕田を利用した農業体験や支援、街づくり関連としては、イギリスの電気バスなどの環境にやさしい交通機関の普及などがあるが、すでに行われており、法規制などがあって実施が難しい。

そこで、ニュービジネス＝ＩＴのイメージから、環境に特化したＳＮＳ事業を提案する。環境活動の課題として、交流の機会が少ないこと、情報発信しづらいこと等があるが、ＳＮＳを利用することで解決できる。

具体的には、トップページで栽培日記系、論文・研究発表系、環境活動系等に分類し、利用者はハンドルネームを用いて気軽に利用できる。他者からの評価システムや掲示板も搭載し、環境に特化することで目的のジャンルに到達しやすい便利さがある。ページ作成費やサーバの維持費などの資金は広告収入や法人会員からの会費、寄付金等で賄う。

法人にとっては、活動が一般の人にも認知され、企業の利益に結びつくし、個人も気軽に閲覧できることにより環境への意識向上につながる。

今回は環境に興味を持ってもらうきっかけづくりとしての要素が強いので、次回はもう一歩踏み込んだ内容としたい。また、データを基にした討論もできればと思う。

※参考

ハンドルネーム・・・・インターネットをはじめとしたネットワーク上で名乗るニックネームのこと。

＜講評＞

・休耕田の利用の例としては、江南市でのレンタル農園事業がある。新しい事業の例をたくさん収集し、利用率などのデータを取れれば検討できるのでは。

・最新の情報を集めるためには、常にクオリティの高い情報を発信し続けることが大事。

１５：００　終了

【補足】

・ベーシックコースには、中学生５名と高校生１名が参加を希望していたが、うち中学生５名は当人の学業上の理由により、最終的には参加辞退となった。高校生１名はアドバンストコースに加わることになった。
・アドバンストコースでは、４つのグループがそれぞれ「まちづくり」「生物多様性」「環境ビジネス」「エネルギー」をテーマに議論を進めていたが、「エネルギー」グループの参加者は卒業を控えた学業上の事由により、シンポジウム当日に会場に参集することができなかった。後日発表資料を提出してもらい、他の参加者に配布し、意見交換・質疑応答・有識者からの講評とアドバイスを全員で共有して、全グループの発表終了とした。

【今後の課題と方向性】

＜課題＞
・通信手段の発達により、遠方の参加者同士がグループごとに事前に話し合いを進めることができ、シンポジウム会場では、最終的な意見のまとめと発表資料の作成、プレゼンテーションの実施となる。話し合いに参加することで、シンポジウムへの参加の意義は十分にあると考えるが、「発信する力」を身につける点においては、やはり当日参加は重要な意味を持つと考える。
開催日の決定には苦慮しており、できるだけ多くの参加者に当日参集してもらえるよう、さらに検討をしていきたい。

＜方向性＞

・これまでに、遠隔地間のコミュニケーション方法としてスカイプ・メーリングリスト・LINEの導入、会場で議論を進める上での関連資料収集や発表資料作成のためのパソコン・携帯端末機器やパソコンの動作環境を整えるための関連機材の購入を進めてきたが、今年度でほぼ必要な環境は整ったといえる。大学生を中心とした参加者はそれらを使いこなし、当初予想以上に成果をあげたと考える。
　従来は当日会場に参加者が参集し、2 日間で議論をし、資料を作成、発表するという時間的に厳しいものがあったが、環境が整備できたことにより、事前に資料を収集したり、議論を進めておくことが可能になった。また、当日参加できない場合も、スカイプで会場の議論に参加することが可能となった。
　このことは、シンポジウムのあり方自体が変化してきており、今後も引き続きこの方向へ向いていくと思われる。この変化は、議論により長い時間をかけることができるため内容が深まることにとどまらず、当日の資料作成と発表にも吟味と推敲を重ることができ、発信力を高めることにもつながると考える。